

野に仏・里に仏

大谷 眞

第五回目の旅・その一
お遍路に生きる

1994年10月14日晴れ

昨夜11時半、神戸は青木港を出港した船は、土佐清水港に午前9時40分に着岸した。2カ月ぶりの四国だ。前回最終日、第三十八番金剛福寺前より18キロを歩き、この待合室で旅装束を解いた。今、その同じ場所で、再びお遍路の衣装に身を包む。いよいよ五回目のスタートだ。

今回の装備は、なぜかまた12キロ。テントを抜いた分、軽くなるはずなのに、やはり同じ重さになるから不思議だ。今回一番の改良点が靴。前回までの軽登山靴から、ハイカットのジョギングシューズに換えた。その分、足も軽く、靴の裏のゴツゴツした感覚が緩和され、前より随分歩きやすくなった。部分的にメツ

シュになっていて、通気性も充分にある。ただ防水ではない分、雨に降られるとお手上げになりそうだ。あとは背中の中の荷物の重さに、どれくらい靴底が耐えられるかだ。

待合所を出ると、今日もすこぶる天気が良い。前回の灼熱の舗装道に懲りて、8月、9月は敬遠したのだが、10月にしてはやはり暑い。歩き出して、すぐ汗が吹き出した。

次の札所、第三十九番延光寺へは、フェリー乗り場からまだ40キロ余りを残している。今回選んだコースは途中山越えもあることから、今日中に一気に歩くのは時間的に無理がある。しかもガイドブックによると、このルートには延光寺まで宿泊施設は期待できない。いずこかで野宿を覚悟したほうが良さそうだ。

山越えに入る前に食料を仕入れるべく、昼近くになって現れた小さな集落で、食料品店を探した。一件目は魚と日用雑貨のみで（考えてみたらおもしろい取り合わせだ）、肝心の欲しいものが見当たらない。

「この上のお店なら、お昼にこはんものが届くはずだから。」

店の奥さんの言葉に、道を登って次の店に行ってみる。おばあさんが三人、人待ち顔で座っていた。お昼を少し回っているが、この店でも今日の配達はまだ届いていない、との事。待つのも何だから、ありあわせのパン類を買って清算を済ませようとすると、

「お兄ちゃん、どこへ行きなされる？」

とおばあさんの一人がたずねてこられた。

「峠越えで延光寺さんまで行きます。」

「まあご苦労さんやね。ほんなら、これ、ジュースを持って行きなさい。」

と1缶、ひよいと差し出だされた。ちよっと気の毒な気もしたが、そのままありがたくいただく

ことにした。

いったん店を出て、ずだ袋から納札を取り出し、名前と住所を書き込んでから、店に戻って先ほどのおばあさんに差し出した。彼女は、へ？という顔でこれを受け取り、あとの二人の所にそそくさと駆け寄せられた。それから顔を付きあわせ、何やら盛り上がった。暇つぶしには絶好の話題提供になったようだ。

長い長い上り道を歩いた。人家はすでに途絶えている。行けども行けど

も、道はゆるやかに登り続けた。所々、工事中の人達と出会い、そのたび、こくろうさま、と声がかかった。

峠でやっと息をつき、これから下りは舗装道と地道が交互に現れた。地図では徒歩道となっていたが、林道の拡張工事が始まっているらしい。さらに下ると、工事中の道のわきに、猫の額ほどの小さな公園があり、ここにベンチを見つけた。時刻はすでに5時近くなっている。この先、野宿に適した場所があるとは限ら

ず、このあたりで手を打つことにした。

明るいうちに、と日記を書き上げてから、ベンチの上に寝袋を広げた。ただしここには屋根はなく、全くの露天だ。まあ、今夜は雨の心配は無いだろう、そう自分に言い聞かせ、中にもぐり込んだ。時刻はまだ6時前だ。

10月15日 晴れ

昨日は明るいうちに寝入ってしまった。ふと目を開けると、天空には月がまぶしいばかりに輝いていた。寝袋から顔を出



して左右を見渡すと、月は煌々と大地を照らし、すべてを墨絵のように浮かび上がらせている。何か不思議な世界に紛れ込んだような、軽いシヨックがあった。

寝る前の軽い頭痛は消え失せていた。寝返りも満足に打てない程の狭いベンチで、おまけに丸太で作ってあるせいか、背中が少し痛んだ。体も固まったような心地がする。

それでも不思議な幸福感に満たされ、無心に夜空を見た。月の明るい分、星がかすんで見えるが、空には一点の雲も無い。流れ星がふうーっと空を横切るのが見えた。

どのぐらい眠ったのか、まるで時間の感覚が無い。かといって時計を見る気もしない。焼山寺への途中、一本杉庵で野宿した日の事を、ふと思い出した。そうだ、あのときも、こうして寝袋の中から夜空を見た。しかし、あのときのような不安感はない。むしろ今、自然と一体になっっていることに、不思議な安堵感を覚えていた。時々、遠くでキツネかなにかの鳴き声があった。

そばの草むらでは虫の音が聞こえている。と、その中にガタガタという音が混じり始め、やがて車のライトらしい光がちらちらしだすと、すぐに一台のトラックが、排気ガスを撒き散らしながら私の横を走り抜けた。がたがたの地道で、荷台をぼんぼん跳ね上げながらテールランプが麓の方に消えると、また静寂が帰って来た。

一体今、何時なんだろう？しかたなく、寝袋から時計を出して見ると、まだ午後の9時だ。もう少し眠っておく必要がある。狭いベンチの上で、何度か寝返りを打った。顔を風がそよそよとなでるが、全く寒さは感じない。そのうちにまた眠りに落ちてしまった。

再び目覚めると、辺りは真っ暗になっていた。月の位置が山の端にかかり、そのかわり星が煌々と輝いていた。天の川の帯が、上下に天空を分けている。先ほどは見えなかったオリオンの三つ星が、今ははっきりと分る。どのぐらい時間がたった

のだろう。手を出して寝袋にさわると、しっとり濡れていた。夜露が降りたのだ。有り得るとは思っていたが、やはり露天で寝るのならカバーを用意するべきだった。それでも気にはしない。中までは染みてはいない、そう開き直って、そのまま横になっていた。

しばらくして時計を見た。ヘッドランプの光が突き刺すように目に染みだ。午前5時前だ。そろそろ起きなければ、と体を起こすと、体中が痛んだ。寝袋から出ると、少し体がふらついた。無理も無い、この狭いベンチの上で、11時間も横になっていた訳だ。しかしよく寝たものだ。寝袋の夜露をタオルでぬぐい、ザックから道具を出して湯を沸かした。寝覚めの熱いコーヒーで、まさに生きかえる心地がした。

そのうち、麓から車の音がしてトラックが一台通り過ぎた。工事にかかると人達が、もう登って来たらしい。荷造りをして、白衣を身につけると、今日の第一歩を踏み出した。時刻は5時30分。西の空



が少し明るくなったせい
か、足元も辛うじて見え
始めていた。

少し下ったところで、
突然犬のほえる声が出て、
一匹のシェパードが吹っ
飛ばすように駆けてくるの
が見えた。野犬か、と身構
えると、すぐにこの犬の
名を呼ぶ怒声が出た。見
ると少し離れた所で、男
が二匹のシェパードの首
輪をつかみ、必至で押さ
え込んでいるところだっ
た。こんな山奥の早朝、ま
さか人に出会うとは思っ
ていなかったのだろう、
ロープを付けずにここま

で登ってきたに違いない。

目の前のシェパードは
うなり声をあげて私を威
嚇している。不思議に恐
怖心はなかった。杖一本
でこれほど強気になれる
とは思わなかった。ヘッ
ドランプを犬の方向に向
け、そのままにらみつけ

た。男の怒声は悲鳴に近
いものがあった。何らか
の危害を加えれば大変な
ことになる、そんな恐怖
心が男の声を上ずらせて
いた。その声に犬が少し
ためらいを見せた瞬間、
杖を強く前に突きだした。
犬はこれにひるみ、男の

方に逃げ帰った。彼はそ

の首輪を必至で抱え込ん
だ。なおもうなる三匹の
犬を必至で押さえつける
男に挨拶をし、その前を
通り過ぎた。男はにらみ
つけるだけで返事はな
かった。

さらに下ると、やがて
集落が現れ、そろそろ目
覚め始めた民家の間を抜
けると、やがて大規模な
ダム工事現場にさしか
かった。工事に併せて、そ
れによって生まれる空間
を、巨大な公園に造り変
えようとしているらしい。

二つの橋を渡ったところで、ダムを見下ろす東屋風の休憩所を見つけ、一服をしようと立ち寄ることにした。

近づいて行くと、誰かが休んでいる様子だ。声をかけようとして顔を見て驚いた。前回7月に遍路をしたときに出会った、あの二人組みのお遍路さんだった。ただし婦人だけで、男の姿は無かった。

「あ！おはようございます。私のこと、覚えておられますか？」
「あれ！以前会いましたね。」
「はい。お久しぶりです。今はお一人で回っておられるのですか？」
「いえいえ、連れは今、トイレに入ってます。」

あれから2カ月。相変わらず逆打ちで回られている様子だ。ちょうど彼女たちが一周した頃に再会した事になる。

「昨夜はどこらに？」
彼女の問いに昨夜の話をした。

「屋根があるところで寝ないと、夜露に濡れてしまいますからね。」

彼女たちは、昨夜はこ

の休憩所で休ませてもらった、と言う。改めて見ると、屋根は大きくて、ベンチも床几台のようにゆったりとしている。たしかにここなら快適に眠れただろう。

話していると、男のほうもトイレから現われた。なつかしく挨拶を交わした。歳もひとつ違いなので、余計に親近感があった。

「お久しぶりです。まだ歩いておられるのですね。」
彼は前回、このお遍路で最後にするかもしれない、と言っていた。やはりまだ心の区切りがつかないのだろうか。それに、婦人の歳も考えれば、一人にはできないのかもしれない。

懐かしくて話が弾んだ。彼らのお遍路仲間の話題となり、遍路の末、お寺に入った仲間の話になった。でも結局、彼は修業のつらさからか、また歩き始めた、と言う。

「お四国病」と言う言葉がある。艱難辛苦の末、結局、本来ならそれで終わるはずのお遍路が、まだ満たされない心の乾きからか、お遍路こそ人生

と悟るからなのか、また再び旅に出る人をこう呼ぶのだぞうだ。その彼もまた「病」に取り付かれた一人だったのだろう。そしてこの二人も、もしかして私もまたいつか……いろいろな人生があるものだ、と思った。遍路には遍路の苦悩と喜びがある。結局は一生が修業であり、悟りなど、程遠く生きるのが、我々凡人ということなのか。

「寒くなっても歩かれるの？」
「ええ。私の場合は少しづつ四季を味わうのも目的ですから。」

「風邪をひかないようにね。屋根があるところまで泊まりなさいね。」

別れるとき、婦人はまた私に心を込めてアドバイスしてくれた。男の方は、にこにここと微笑んでいる。いつかもう一度、二人に会えるような気がした。

ダムをあとにしてまた歩いた。国道56号線に合流し、しばらく行くと「延光寺」と標識があり、ここから左手に折れ、第三十九番延光寺に到着した。

門前の駐車場に、荷物を満載した自転車一台、人待ち顔で止めてあった。びっくりするほど細々とした生活用品がぐくりつけてある。はて、一体誰のものだろう？

古い仁王門の前の手洗いで、顔と手を洗った。野宿の後だから、さぞひどい顔だったろう。本堂と大師堂で久しぶりにお経を詠み、この後ベンチを借りて朝食をとった。

地図を広げてこの先のルートを確認していると、よれよれの遍路姿の老人がふわふわと歩いて来た。

歯が抜け落ちて、白い不精髭が伸びている。それでいて、ひょうひょうとした雰囲気か漂っていた。「やあ、おはよう。歩いてるの？」

「おはようございます。歩いていきます。」

老人は首から納札入れをぶら下げている。その箱に、始めて見る納札が張り付けてあった。そうか、ダムで再会した二人が言っていた「錦（にしき）の札持ち」とは彼の事か。そう言えば、もしかして延光寺で会えるかも知れないよ、と聞かされて

いた。（ちなみに、私のような初心者の納札は白、それがお遍路の回数によって色が変わり、五十回以上は金、百回以上が錦、と変化していく。）札の横には百十一回巡拝、徒歩五十一回、自転車六十回、と誇らしげに書き添えてあった。問うと、しかも野宿での巡拝のと。

「百十一回と言うと、どのくらいかかったんですか？」

「そつだなあ、普通一回回るのに、2カ月はかかるから……。それにわしは



気に入ったら、一カ所にしばらくはいるからね。」

「えーと、二かける百十一で二百二十二カ月・・・、え！もしかして二十年近くかかっているんじゃないですか！？」

「そうだねえ。」

と本人はひとごとのように言う。それから、私の持っていた遍路地図を見て、

「迷う人が多いから、次の四十番さんへは国道を歩きなさい。」

と忠告してくれた。無理をして山道を歩くことはない、と言つのが彼の意見だった。どうも彼は、この地図には批判的らしい。

ここへ団体のお遍路さんが、どやどやとやって来た。私の大きなザックを見つめ、

「おや！お歩きなんですか！」

と驚きながら声をかけてくれた。大先輩を横にして照れくさく、

「私なんかより、こちらは百十一回の大先輩ですよ。」

と老人を紹介した。人がどっと集まって来た。彼の納札入れに書かれた百十一回の文字と、その横

に張られた錦の札に注目が集まった。

「お遍路さん、お接待させてください。」

一人の婦人が千円札を老人に差し出した。彼は悠々とそれを受け取り、腰の袋から小さくたたんだ錦の札を取り出し、お礼に、と彼女に手渡した。これを横で見っていた別の婦人が、

「私にも売ってくださいー！」

と千円札を差し出した。とたんに老人の顔が険しくなった。

「わしは商売をしとるんじゃない！」

この声に驚いて近くにいた夫らしい男が飛んで来て、

「お遍路さん、私に免じて、どうか気を悪くせんでください。」

と平謝りに謝る。婦人もおろおろとして、

「私、どう言えばよかったですでしょうか？」

と私に言うので、

「お接待させていただきます、と言われたらよかったですか？」

と小声で忠告した。これをきっかけに、次から次へと千円札が老人に差し

出された。そのたびに、彼は悠々と錦の札をお礼に手渡した。あつと言う間に千円札の束が彼のポケットに収まった。お札を手にした婦人たちは、銘々に、

「朝から喉がいたくて、でも、これでもう大丈夫。」

「ああ、ありがたい。今晚からよく寝れます。」

と、お札を押し頂き、大切そうにしまい込んだ。騒ぎを聞き付けたこの団体のリーダー（先達と言われている。）もやって来て、彼に挨拶をした。彼とて三十六回もの巡拝の経験者とのこと。百十一回（しかも野宿で自力とは！）と言つのは、かなりの存在感なのだ、と改めて感心した。

「錦の札とは話だけで聞いていましたが、今日初めて拝見しました。」

と私が言うと、

「これ、お接待してあげるから、財布の中に入れてきなさい。」

となぜか金の札をいただいた。先程一喝された婦人が、私にもお接待、といつて五百円玉を差し出された。なんだか老人のコバンザメになったよう

な気がしてためらうと、「お接待はお断りしちやいかん！」
とまた老人にたしなめられた。ありがたくいただく、また一人、五百円を差し出された。
「わたしらは車でしか回れないけど、わたしらの分もお参りしておいてね。」
これをそばで

聞いた老人は、
「車だからお遍路に値打ちが無いなんて思うんだったら、最初からやらなければ良い！あんたたちが楽をしてお参りできるということは、お大師さんに、それだけ先に功德をいただ

いている、と感謝すべきなんだ。いいかね、『思つ』という漢字は、田に心を植えると書くだろ。良い心のタネをまけば良い心が育つ、ようは心の持ち方ひとつ、と言うことなんだ。どんなお遍路でも、お大師さんは必ず見ていてくださる・・・。」

この話には一同うなず

いた。彼なりに、二十年の歲月の中から会得した真理の一つなのだろう。私も大切に彼の札を財布に収めた。
国道を行きなさい、と何度も忠告してくれる老人に別れを告げ、延光寺を後にした。彼の言葉通り、今日の予定の山越え

人だった。お陰で私は彼女からお接待をいただき、彼女はめったと手に入らない「錦の札」を獲得した。そして老人は、またしばらく、ゆったりとお遍路が続けられるだけの資金を手にできた。皆が皆、それぞれにそれぞれの満足を与え、そして得たの



は、見合わせることにした。

だった。

国道に戻り、次の第四十番観自在寺へ向けて歩き出すと、すぐに後ろから、先程の団体さんの車が、警笛を鳴らしながら走り過ぎて行った。一番後ろの席で、一生懸命、うれしそうに手をふっている婦人がいた。あの一喝され、私がアドバイスをした婦

後はまた、汗にまみれ、歩き続けた。今日の宿は町営の「あけぼの荘」に予約を入れた。一本松町という地域の健康センターとしての施設のようだった。部屋はゆったりと清潔。今夜はゆっくりと眠れそうだった。